1998.1.14

尼崎市立小園中学校　第2学年　社会科通信

なんでやねん

発行責任者　倉橋　忠

No.50

幾多の試練を乗り越えてきたわれわれの生命
君は自分の生命の存在をどうとらえ、
どう生きる？！

わが国の歴史上での飢饉は、今日の研究で判明している件数だけで、西暦1年から西暦1975年までの間に、計336回を数える。その中でも、飢饉の多かった時代は、奈良・平安・室町(戦国)・安土・桃山時代である。これらの時代では、100年間に55回(奈良)、63回(平安)、29～30回(室町～安土・桃山)を数え、支配階級の収奪(しゅうだつ)が厳しかった時代と、戦乱の多かった時代に、飢饉は集中していることが見えてくる（弥生時代の資料がないことや、戦国時代については戦乱で資料が失われていると考えられるので、それらの時代の飢饉数は現在判明しているよりもかなり多いと推測される）。

江戸時代(250年間)では、約50回の飢饉が民衆を襲った。その中でも、特に享保・天明・天保の飢饉を３大飢饉とよぶ。なお、関西地方では寛永・享保、東北地方では元禄・宝暦・天明・天保の飢饉が大きな被害をもたらした（これらをあわせて近世の６大飢饉ともいう）。

天明の浅間山大噴火の音 400キロ先の和歌山まで

「天明の浅間焼け」と言われるほど大きな噴火であった。1783年(天明3)の浅間山大噴火（こちら参照）による飢饉は有名で、約四百人離れた和歌山県日高郡に伝わっていたことが、同郡出身の江戸時代の文書から分かった。この記録は、浅間山のふもとの群馬県北部に残る文書（西国「浅間大変覚書」）には、「昼、大変地震に、夜、大変雷に、翌朝、大変雨に」とあり、その翌朝、大変な音が聞こえたという記述はない。また、この文書は、天明の噴火（浅間焼け）の大きさを実証する貴重な記録になっている。

この文書は、広川町(現在の日高郡)の庄屋（村の長）であった古瀬(ふるせ)惣兵衛(そうべえ)が、この地方の豪農だった佐野(さの)惣兵衛の代々当主が、「一八九一年から八一四年までの身分日記」で記録した出来事を紀(き)している。

五代目の当主の記述によると、「天明二年(一七八二)八月大風、諸々騒動し地震とおびただしい降雨が続き、大雨を通り越して発砂したようだ。あるいは大変の音が聞こえた。」

「天明の浅間焼け」とは、1783年(天明3)に起こった大噴火で、江戸時代の飢饉(きいん)や、人口減少の原因となった。この噴火は、浅間山(長野県)の北側の斜面が大きくくずれ、大量の土砂が流れ出し、利根川を埋め、流れをせき止めてしまった。この土砂が、約4キロ先の鎌原(かまはら)村を襲い、村の人々の大半が死んだ。この土砂は、利根川を埋め、流れをせき止めてしまった。この土砂が、約4キロ先の鎌原村を襲い、村の人々の大半が死んだ。

この記述が本当で、もしそれが、「自然現象出力の大きさ」を実証するものであるとすると、「自然現象出力の大きさ」は、「人間の生命」を奪ってしまうほどの大きさであるということになる。

この記述が本当で、もしそれが、「自然現象出力の大きさ」を実証するものであるとすると、「自然現象出力の大きさ」は、「人間の生命」を奪ってしまうほどの大きさであるということになる。

「虚空鳴動　障子響く」　旧家の古文書

浅間山大噴火　有史以来七十数年ぶりの大噴火。3年の大噴火では約1500人が死亡。

毎　日（広島）・朝日新聞　'96・2月1日（木曜日）

さて、今回は、92万人の餓死・疫死者を出した、天明の飢饉を紹介しておこう。

今日の畦にも残る・彼岸花　1995年10月姫路市

天明3年(1783年)の災害は、飢饉と地震、大風と洪水からはじまった。京都および近畿の諸国は、真夏になっても冬のように寒かった。4月下旬から降り始めた長雨が、8月になってもやまなかった。日本全国が、冷害におそわれた。加えて、その天明3年の7月に浅間山が大噴火し、信州(長野県)では約2000人が死んだ。つづく天明4年・5年も凶作がつづき、さらに天明6年(1786年)には、関東各地で大洪水があり、凶作となった。

その被害は、全国に及んだ。関東地方でも、食料がつきた農村では、食べられる限りの草の根(彼岸花も食べている[1])や、木の皮(松の木の皮など)などを食いつくし、さらには、壁土までむさぼり食うという状況となった[2]。

中でも、特に悲惨だったのは、東北地方であった。天明3年から4年にかけての間に、津軽藩(現在の青森県)だけで餓死者10万人、疫死者3万人を出した。他の地方に逃げた者2万人、家族全員が死に絶えたのは3万5000軒もあった。

金持ちは、「ところ」という、おそろしいほどの苦みのある草の根からつくった団子などを買った[3]。さらに、わらの団子や、松皮の餅などを食べたり、500文で犬1匹、300文で猫1匹を買い食べた。しかし、貧乏人はそうはいかず、餓死した[4]。

天明の4年の南部・津軽の両藩では、死人の肉まで食い尽くした。たとえば、ある村の源次郎の妻は、餓死した14歳の子どもの肉を、夫とともに4日間で食い尽くしたが、後になってから、「じつは私一人で食べたかった」と言ったと記録されている。別の家では、治助という男が、生きている自分の子どもの股にかみついているところを隣人に見つけられている。さらに、他人の死肉を食べて生き延びた16歳の男子が、自分の母親と妹の屍まで食べ、はては人を殺してまでその肉を食べたという記録も残っている[5]。

これが飢饉の実態だった。見せかけの「豊富な食料」の国、今日の日本では考えられない事実だ。一部の支配階級・武士の生活のために、生産力が低く、科学力・技術力も低かった江戸時代の民衆は、このような生き地獄を味わった。

1) 渡辺実『日本食生活史』吉川弘文館 1964年 p.247.　　鋤ロ清之『日本食物史』柴田書店 1987年 p.242.

なお、彼岸花は毒性のある植物であるが、飢饉の際の非常食として田の畦(あぜ)に植えられていた。第２次世界大戦中も多くの農村で食べられており、昭和時代にも彼岸花で飢えをしのいだ体験をもつ人々は多い。

2) 中島陽一郎『飢饉日本史』雄山閣 1981年 p.49.

3) 「ところの商品化」については、菊池勇『飢饉の社会史』校倉書房 1994年 pp.169-173.

4) 前掲中島陽一郎『飢饉日本史』p.65.

5) 前掲中島陽一郎『飢饉日本史』pp.66-68には、その他の多くの事例が紹介されている。